

昭和三十四年三月二十日
郷土誌資料第二集

大和町のむかし
吹上横穴墳

大和町教育委員会

もくじ

序	2
一、はじめに	3
二、発掘の経過	4
三、遺跡	8
四、遺物	9
五、おわりに	11
付古墳について	12

図版、写真もくじ

第一図	遺跡附近地形図
第二図	発掘状況
第三図	遺跡実測図
第四図	美道より玄室を望む
第五図	石室壁の一部
第六図	平瓶実温図及平瓶
第七図	長頸つぼ実測図及長頸つぼ

郷土史研究について教育委員会の意図するところは、第一集に詳述してあるので省略する。第一集刊行以来特に町内各方面の関心もたかまり、関係者各位の格別なる御協力を得て逐次郷土史研究が歩一歩と前進していることは限りない喜びである。特に客年十一月三日文化の日を記念して催された郷土史展は非常なる成果を得ることができ、更に一段と研究調査を進める意気に燃えたと同時に関係者各位の絶大なる御支援御協力にちゆう心より感謝の意を表すものである。

此の時期と相前後して「文化財保護条例」を町及び町議会の御理解ある審議を経て決定され、これに伴う「文化財保護条例施行規則」及び「文化財保護審議委員等に関する規則」を教育委員会に於て制定し、郷土史研究の態勢が完備されたことは周知の通りである。其の間本集に発表の通り「吹上横穴墳」の発掘調査を進めた。発掘しても人骨の存在は期待できぬ予想であったが、奈良朝時代の人骨四体が発見され考古学資料として貴重なものであることが確認され、意義深い調査研究であつたものと確信している。

この解明された記録や関係資料を公表すると共に町民各位に報告しはこり得る考古資料を通して大和町先人の生活をしのばれんことを希望し第二集を刊行した次第である。

本発掘調査に際しては地主柳下喜之輔氏及び地元野浦正二氏、清水源五郎氏の格別なる御協力と県教育局文化財保護係柳田先生、文化財調査委員鎌田良賢先生以下関係者各位の真理探究へのあふるる情熱と献身的な御協力に心からの感謝と敬意を表するものである。

昭和三十四年三月二十日

大和町教育長 室 賀 茂 美

はじめに

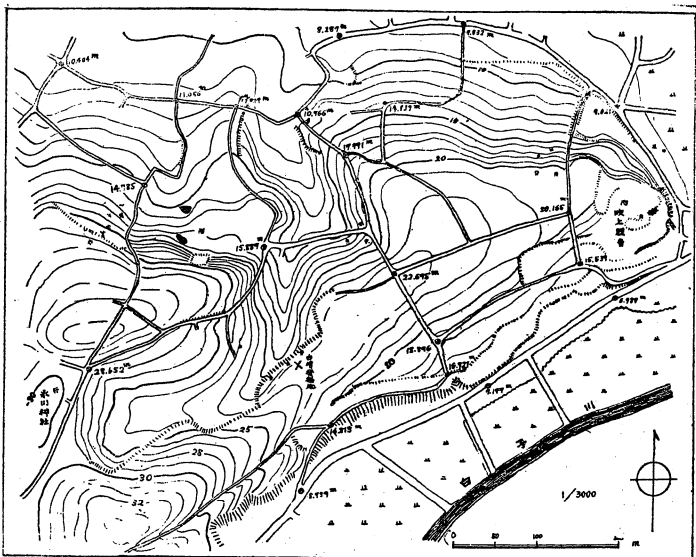
横穴墳は古墳時代の終り頃に行われた古墳の様式であるが、本県では比企郡吉見村所在の「吉見の百穴」が全国的に知られている。これは凝灰岩の肌には蜂の巣のように掘られており、かつては住居跡といわれていたものである。

今回調査した古墳もこの「吉見の百穴」と同じ性格の横穴墳で、岩壁のかわりにロームが利用されているわけである。

遺跡は北足立郡大和町吹上、標高二十米程の台地の斜面を利用して築造してあり、すぐ下は新河岸川に望む瀨谷となつている。遺跡のある台地は東方に長く突出て舌状をなし、白子川を狭んで東京都に接している、この附近では、下部に褐色砂礫層がありその上に不整合に三〜四メートルの粘土砂互層が重り、更にこれらを六〜七メートルのローム層がおおつている。

この台地には縄文文化、弥生文化、又古墳文化等の遺跡や遺物に富んでいるが、城山遺跡(註1)はすでに調査され、報告されている。本遺跡の東方約二〇〇メートルの地点には縄文中期の貝塚(吹上貝塚)(註2)が確認されている。又その前方には近在に名高い吹上観音がまつられ、世人の信仰するところである。

本調査は大和町教育委員会の行ったものであり、発掘は柳田が担当した、発掘期間中は近來稀な大雨にあり、洪水等の騒ぎで一時中断したが教育長はじめ郷土史調査委員、大和中学校生徒等の手により無事終了することができた。深く謝意を表すものである。



第一図 遺跡附近地形図

二、発掘の経過

(一)、発掘に至るまで

「城山遺跡」の発掘によつて、この方面に対する町内の関心が高まり、土器、石器の蒐集に強い意欲を示す人や郷土の歴史にたいへん興味をよせる人と相知り相語り、又種々この情報を提供してくれる人々が現われた。吹上横穴墳もその情報の中の一つであつた。

この情報の概要は次の通りである。今よりおよそ二十年前、横穴墳所在の土地所有者柳下喜之輔氏は、当時山林であつたこの土地を開墾して畑地とした。深いあぜを掘つているとポツカリと穴があいた。半月はそのまゝにしておいたが、このことを聞込んだ新井氏(当時白子小学校訓導)が柳下氏に頼み、この穴を発掘した。その発掘時の状況は、柳下氏の記憶によれば、深さ約一間半(一、七メートル)に床面があり、玉石(礫か?)が敷きつめられており、広さ約五平方メートルの隋凹形の室であり、その入口となる部分には石の門(柳下氏は石の鳥居という)があつた。相当注意してさがしたが、内部には玉石の外に何もなかつたという。更にこの穴の北側に開墾地をひろげ、木の根を深く掘り起している時この穴の北約二十メートルの箇所にもた穴があいた。柳下氏は崩れた箇所より内部を見、さきに発掘した穴にあつたものと同様の石の門があるのを認め一応は取り出して見たが、再び穴に投げ入れ、たちまちこの穴を埋めにかかつた。穴があいていたのは一、二日の間であつたという。これが今回発掘の横穴墳である。崩れた際に見たのは石の門だけであつた由である。多分床面は崩れた土で埋まり覆われていて、露出の箇所はなかつたものと思われる。以上の話から横穴古墳であることが確認されたので、土地所有者に次期作付の延期を要請し、早急に発掘の運びとなつた。

(二)、発掘の準備

発掘の手続、土地所有者より発掘の承諾書を買ひ、県教育委員会を通じ、文化財保護委員会に埋蔵文化財発掘調査届を提出した。

発掘の用具。殆んど「城山遺跡」の際に於けると同様のものを用意し、他に土を掘り上げるため、綱つきバケツを準備した。

発掘参加人員。県教委柳田主事、教委室賀教育長、同事務局大沢、伊藤、富岡各調査委員、原田、池田、小谷野、笹沼、宮原、各調査委員、大和中瀬谷、村井各教諭、大和中生徒(二年C組、三年各組男生、一、二年生若干名)、他に新井、野浦、石田、柳下各氏、写真、西成田氏。

(三)、発掘(発掘日誌より)

昭和三十三年九月十六日(火)午後一時より同四時まで

午前中降雨の模様ではあつたが、発掘を行うことに決定、諸準備を完了。

現地にて富岡委員が生徒に対し古墳一般及びこの横穴についての概略を解説し、ついで発掘要領を説明して発掘を開始する。

①、羨道部(せんだうぶ)と推定される部分に、これと直角に巾一メートルの試掘溝を入れる。耕土(黒土)が深い。この部位で地表下約五十センチメートルの箇所に復原可能の平瓶を出土する。

②、一方陥没したといわれる部位をボーリングし、陥没した穴の縁辺の一端を探ぐり当て、この部分を掘り進める。陥没した際、その穴の周囲より土を崩して埋め立てたため、地表より七十センチメートル前後ではローム層の壁に円匙(えんぴ)の跡が認められる。この壁に沿つて掘り進めるうち、地表下一、五メートル付近より固結度の低い粘土砂の細かい互層のこぶし大乃至人頭大の数塊が掘り出された。恐らくこれは褐色砂礫層のすぐ上のもので、この付近の台地の崖下には随所に見られるものであるが、これを用いて羨道部の入口の門を作つたものと思われる。前述の陥没の際、柳下氏に取り出し、再び投入した石材の破片ではないかと思われる。

上部の直径約二、五メートル、深さ約一、五メートルに掘り、第一日終了する。

九月十七日(水)雨天のため中止

九月十八日(木)豪雨のため中止

九月十九日(金)午後一時より作業

発掘の穴には、前日の大雨により殆どあふれる程に水が溜つた跡があり、自然排水したあとで、土に水分が非常に

多い。

急速に掘り進み、四囲の壁も現われた。一見、方形に近い室をなしている。たゞし北側の壁は崩壊して不明瞭である。西側の壁の中央部に羨道部とおぼしき粘土砂の石材を門型に立てたと考えられる部分が現われた。この付近から水を含んで紫灰色を呈したこぶし大の粘土の塊が幾つか掘り出された。

ロームの壁と埋め立てた土とはよく分離し、ていねいに掘ればロームの壁に傷をつけることはない。この横穴墳掘さく当時の壁がそのまま現出する。

床面の一部が現われたところを見ると、鶏卵大からこぶし大の礫がすき間もなく敷き並べられている。

羨道部の入口部分の外側よりも掘り進み、室(玄室)との間にトンネルを通ずる。玄室(げんしつ)の向きは正西である。

午後四時生徒終了。委員等四時半終了。

九月二十日(土) 本日は生徒参加せず。

前日に掘り上げた土中に骨片を発見、三片を拾い上げる。

引き続き午前中調査委員二名で発掘を行う。床面の礫がいよいよ広く露出する。礫の大きさは子どものこぶし大のものが多い。掘り進むうち玄室の中央部に近 判然と人骨とわかるものの一部を発見、時に午前十一時。ここで一応午前中の作業を打切る。

午後調査委員六名に増加、入口に近い側より、敷つめた石の半ばが現われる程度に床面を洗い出す。細心の注意を以て次第に奥に進むうち、大腿骨等が現われる。ロームは水分を含み、骨片に密着し、かつ骨片の或る部分は崩れ易く、いちいち針で土をはがさねばならなかつた。また骨のとけかゝつていているものもあり、これらとけかゝつていている骨は骨かくのうち比較的細い部位のようである。歯においても大きな臼歯は堅固であり、磨けば光沢さへ出る程であるが、中には小さくしかもあずき色に変色しほうろう質の部分だけ残つていられるものもある。割合形のしつかりした大部分の歯がついて下あごの骨も出土している。頭蓋骨はすべて粉碎されている。状況からみて落盤した時にくだかれたものと考えられる。最もしつかりしているのは大腿骨であり、他は各部分の破片でほとんど復原不可能である。埋没していた人骨の大部分は一応露出され、午後四時半作業打切る。

九月二十一日(日) 作業休止

九月二十二日(月) 生徒参加せず

午後より小雨降り出す。柳田主事指導のもとに玄室内の実測を始める。雨は一向に降り止む気配もない。羨道入口を掘り進め原形を出す。

雨はいよいよ激しさを増す。中学より天幕を運搬し、苦心して現場の上に張る。

人骨の配置状況及び周壁の条痕を撮影、人骨を区分けして収納する。全員雨にぬれそぼちながら、泥まみれになりながらの作業である。肌寒く、ようやく暮色せまる雨の古墳の作業は午後四時半打切られた。

これ以後体育条の準備、つづいて九月二十六日、町内各所に二十二号台風による絶大な被害があり、発掘は一時中断のやむなきに至つた。

十月四日(土)

午後一時半より調査委員二名最後の床面洗いを行う。土に水分が多く、副葬品その他の遺物を見付け出すにはよい状態ではない。かなり綿密に探索したが見るべきものは発見できなかつた。

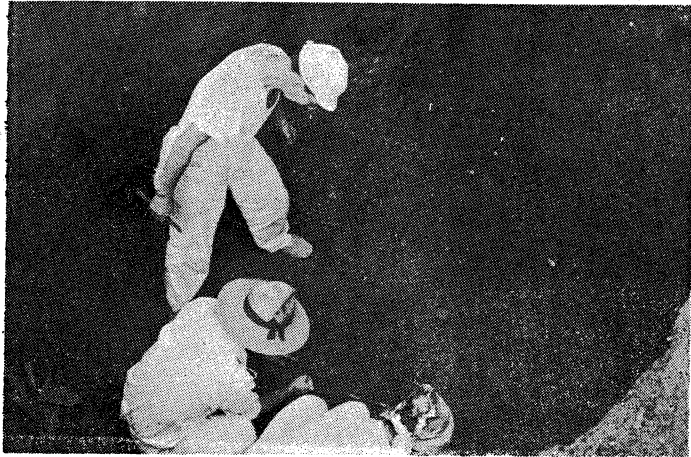
十月八日(水)

東大人類学教室におもむき、鈴木教授に横穴より発掘の人骨の鑑定を依頼する。

十月十一日(土) 午後、原田調査委員及び中学生五名により、横穴の実測残部を完了する。

十月十七日(金)

午前十時半より埋戻し作業を行う。大和中三年各組男生が作業に当る。午後三時半終了する。

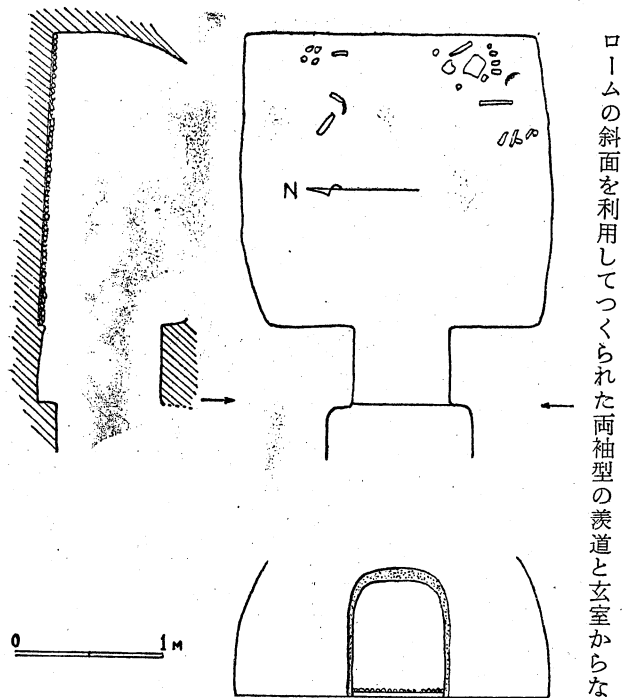


第二図 発掘状況

発掘開始より終了まで一ヶ月余り。天候に恵まれず、加えて台風の襲来も受け、種々行事も重なり、発掘に不適の状態が続き、心せきながらいたずらに日を送つた如く見える。しかしここによく「吹上横穴」の発掘が完了した。

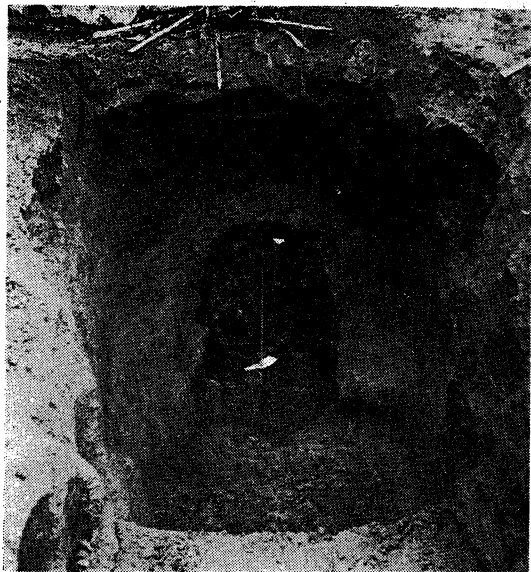
この項(富岡)

三、遺跡

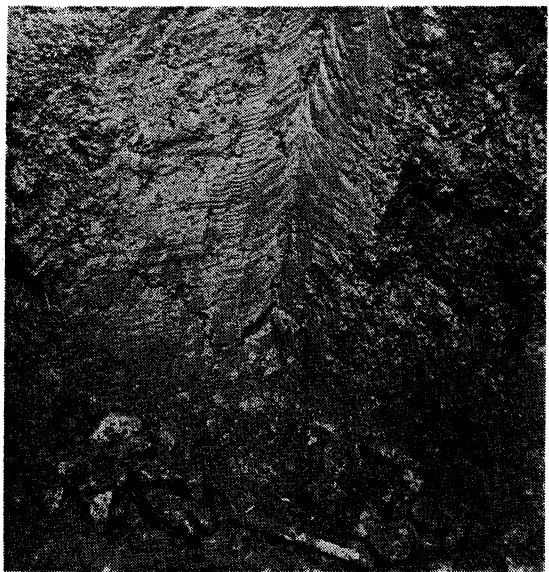


第三図 遺跡実測図

ロームの斜面を利用してつくられた両袖型の羨道と玄室からなる横穴墳墓である。玄室の奥壁巾二、〇メートル、前壁巾約一、八〇メートル、奥行約二メートルの正方形に近い平面で、壁の高さは上部が破壊されて不詳である、羨道の中は約〇、六メートル、奥行約〇、六〇メートル高さ約〇、八〇メートルある。主軸は真西の方向を示し、玄室の床面は羨道部より六センチメートル程さがつておりこぶし大の礫が敷き詰められていた。羨道入口は粘土砂岩によりアーチ型に縁どられ、前庭部と区切られている。前庭部は種々の都合で確認できなかつたが、この位置から須恵質の平瓶が出土している。羨道の天井はアーチ型に近い形をし、床面は玄室に近い方がやや高くなつていた、掘窄用具は双巾〇、九一、〇センチメートル程の細いスキと推定される、その一部が前壁隅に残されていた。(第五図参照)



第四図 羨道より玄室を望む



第五図 石室の一部

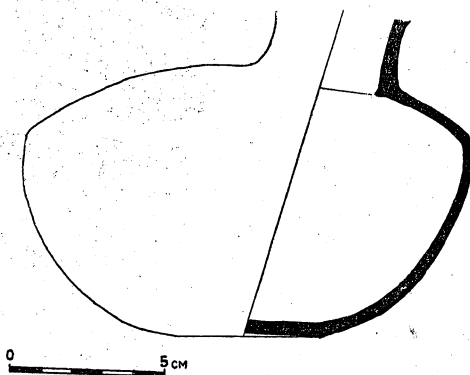
石室に敷きつめられていた礫はローム層下の礫と思われ珪岩、閃緑岩、輝緑岩、砂岩、凝灰岩等である。

四、遺物

出土遺物は少なく、羨道前庭部から出土した須恵質の平瓶及び玄室内で検出された人骨四体分である。
1 平瓶 (第六図)

地表下約五〇センチメートルの位置で発見されたもので、口縁部、底部の一部が欠失している。現高約一〇センチメートル、底径推定四、八センチメートル、肩の張つている所で径一四、五センチメートルある、器厚は二〜五ミリメートルを算し、胎土、焼成ともに良好である、胴部以下にロクロ痕を残し、肩部には自然釉が附着して、灰青色の

色調を呈する、糸切りの平底である。



第六図 平瓶実測図



平瓶

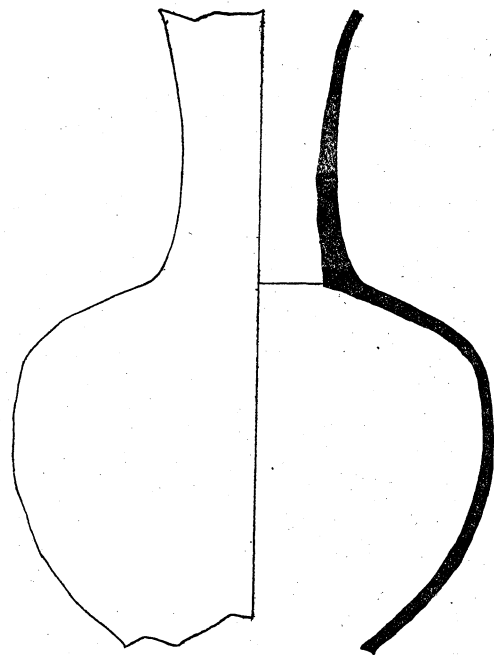
2人骨
四体分検出されたが、そのうち二体は成年の男性、(二十四、五才から三十才どまり) 一体は同じ年令位の成年の女性、もう一体は幼児の骨である。(註1) 頭骨大腿骨等であるが、湿気等のため、もろくなつており、やや茶色をおびている。

3 長頸つぼ (第七図)
須患質の長頸つぼであるが

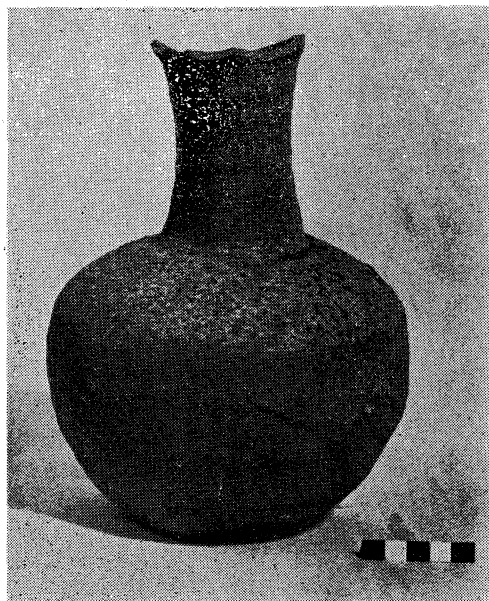
これは附近から出土したものである。口縁及び底部を欠くので全容の正は不明であるがおそらく、脚付の長頸つぼではなかつたかと推定される。現高約二三センチメートルあり、灰白色の焼成度の高い、肩部に自然釉のじみ出た口クロ痕を胴部以下に有するつぼである。

註1 東京大学人類学研究室鈴木尚教授の鑑定による

第七図 長頸つぼ実測図



長頸つぼ



五、おわりに

1 従来横穴は古墳時代後期から末期に行われた古墳の一様式とされ、又山腹に作られると考えられて来た。事実横穴は丘陵地帯に多、分布している。例えば本県の吉見村大字吉見、或は黒岩、神奈川県三浦半島等の、いずれも山地性の丘陵の山腹をえぐつて横穴をつくつたものである。しかし最近ロームを利用した横穴が確認され、今までに川口市東本郷(註1)、東京都成増(註2)に所在することが知られている。

2 古墳は県内各地に分布しているが、多くは群集墳といわれる高さ二〜三メートルから四〜五メートルの円墳である。近くの朝霞町は古墳群の存在が知られているが、大和町には古墳の存在は現在確認されていない。これは以前に

取りこわしてしまつたものであろうか、全然知られていないということから推して高塚を築くだけの権力者がいなくなつたか、財力がなかつたか又は住居地として、古墳は築かなかつたのか、将、横穴墳のみを使用したのか不明である。いずれにしても縄文前期から後期、弥生、土師器、須恵器等の遺跡、遺物は発見されているので、引き続き先人は居住していたものと推測されるが、古墳のことについては今後課題である。

3 今回調査した横穴は両袖型の方形に近い型をしている点(註3)、出土した須恵器等から考えて古墳時代末期、おそらく七世紀の終りから八世紀に入る時期につくられたものと推定され、他の例から推しておそらくこの附近にはこれと同じ様式をもつ横穴墳が群をなしていると想定される。

註1 川口市東本郷遺跡報告書

昭和三十四年三月

川口市教育委員会

註2

工事人夫より聴取現在人骨は板橋区立赤塚第二中学校に保管

註3

神奈川県文化財調査報告第二十一集

一九五四年

神奈川県教育委員会

付 古墳について (特に型式を中心として)

古墳とは「太古の墳墓」という意味で、盛土を有するもの、石室を有するもの、副葬品があるもの等の定義がある。そしてこの古墳が造られ始め、それが栄え、衰えるような現象の母胎となつた社会の時代を古墳時代と称している。普通は三世紀後半から七世紀前半までを古墳時代といつてはいるが、地方により異なつてくる、本県の場合は五世紀後半から八世紀半ば頃までを古墳時代といえるのではなからうか。

古墳の型式もいくつか分類されているがはじめは高い自然の丘陵を利用し、若干の盛土をした程度と思われる。

1 円墳

最も多く、群集墳の主体をなしている。高さ一ノ二メートルの小円墳は開墾等により破壊され易く、今までにこわ

された数は無数であろう。これら小円墳は副葬品も少なく、こわされても見逃されやすいが、古墳時代の終り頃の集落等を究明するには大事な資料であるので大事に保護保存したいものである。

県内には日本一といわれる円墳丸墓山が行田市にある。

2 方墳

方形の型をしているのでこの名がある。中国にある型で、これは天円地方という考えから発達したといわれている。県内にはこの種のもの少なく、比企郡小川町に二基、熊谷市に四ノ五基、大宮市一基、大里郡に二ノ三基、あることが知られている。この他に県史によれば北葛飾郡庄和村に二基あると記載されているが現在はその型をとめていない。

3 上円下方墳

これは方墳の変形である。熊谷市広瀬にある山王塚は国指定史跡として有名で、県内にはこの他数例あるにすぎない。

4 前方後円墳

別名二子塚、車塚、鏡塚、ひょうたん塚、銚子塚、ひさご塚ともよばれているが、前方部と後円部の、高さ、中、大きさ等により、前期、中期、後期の様式にわけられている。県内にも埼玉古墳郡の二子山古墳はじめ数多くあり、いずれも大型墳の部に入るが、大里郡岡部村今泉の丘陵中に見られるように長軸径が一〇メートル内外、後円部の高さ一メートル前後の小型のものも稀にはある。(註1)

前方部はなんの為につくられるのか、いろいろの説があるが、

(1) 主墳の後円部をおごそかにする。

(2) 前方部を祭壇とみる。

(3) 陪塚を意味する。

(4) 広口つぼの土器の平面形である。

等といわれ、一定しない。

5 横穴墳

丘陵、山地が軟かい凝灰岩からできている地方に多く、斜面を利用して横穴をつくる。神奈川県横須賀、横須賀、本県の吉見等が有名である。最近本県ではロームに切こんだ横穴が発見されている。古墳時代の後期から末期にかけて行われた様式のものである。

6 地下式墳

地面に垂直に穴を掘つて地表下に玄室をつくる方法で、ローム層地帯にかぎられている。県内ではいままで浦和、鴻巣、所沢、東松山、武蔵町等で調査報告されている。この方式も後期から末期に行われたようである。

以上が大体の型式の分類であるが、时期的区分は石室等の内部構造、棺の材質、形、石室を構築する石の積み方、副葬品等によつて行われるのが普通である。

又古墳からはよく素焼の埴輪が出土するが、埴輪の起源については説がいろいろあり一定しない。特に形象埴輪は当時の社会の様子を知ろうえにも重要な資料となつており、あらゆる角度から研究されている。(柳田敏司)

註一 昭和三十三年十一月埼玉県教育委員会による大里郡内横穴現状調査の際発見

あとがき

第一回の城山遺跡の発掘に続いて、第二回目の「吹上横穴」の発掘を九月中旬に計画した。発掘期間中雨に悩まされ続けた。ことに九月二十六日、二十二号台風の来襲を受けて、発掘現場は勿論のことながら町内各所に絶大の被害があり、発掘は一時中断のやむなきに至つた。尤もこれ以前に重要部分の仕事が大体終了していたのは幸いなことであつた。

大和町内に古墳といわれるものは、現在殆どその存在が知られていない。字(あぎ)名あるいは小字名(こあぎな)に〇〇塚という名があるが、果してそれらに古墳があつたかどうか知るよしもない。たゞ吹上観音本堂背後の小高い所は前方後円墳であつたといひ、また聞くところによると町内にあつた二、三の塚が近年取り壊されたということである。今回発掘のもののように埋没している横穴古墳などは、何らかの機会によるほかは発見されないうちに見過ごされてしまふ。

今回のはたまたま郷土誌調査の仕事が進み、郷土史学同好の各位の御理解と御協力により、この吹上古墳の存在が確認され、発掘の運びとなつた。

発掘に際し終始懇切な御指導を賜つた、柳田先生に深謝し、発掘に従事された調査委員各位並びに大和中学二、三年生に感謝する。また土地所有者柳下喜之輔氏には多大の犠牲にも拘らず快く発掘を承諾され、期間中種々御便宜を与えられたことに對し、深く感謝の意を表する次第である。

表題文字は室賀教育長をわずらわした。

(富岡記)

昭和三十四年三月二十五日 印刷発行

非賣品

編集兼
発行者 室 賀 茂 美

板橋区上赤塚町九四

印刷所 高知堂小畑印刷所
発行所 大和町教育委員会